

覇権交代7

ゲーム・チェンジャー

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

目次

プロローグ	13
第一章 ポリテイクス	20
第二章 督戦隊の帰還	42
第三章 釜山市長	71
第四章 簡単なお仕事	98
第五章 都市ゲリラ戦	125
第六章 ソード・スナッチ作戦	150
第七章 敵対的攻撃	177
第八章 D F-17 ミサイル	201
エピローグ	221

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

ど もんこうへい
土門康平 陸将補。水陸機動団長。海南島で戦死した水機団長の後任として、小磯の戦時権限で水陸機動団長、陸将補に昇進した。現在、少々浮かれぎみで部下たちに嫌がられている。コードネーム：マウナケア。

〔原田小隊〕

はらだたくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑 友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた
田口苾太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだいき
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあやか
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。コードネーム：マカルー。

うるしぼらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

い い かける
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

み どう そう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじ さねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：ボーンズ。

かわにしまさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

おだざりしろう
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびるあきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたくま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あまりひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉の同期。

〈水陸機動団〉

しばひかる
司馬光 水陸機動団教官。香港に潜入して、本土派と接触している。

うえぞのひろき
上園広樹 陸将補。水陸機動団長。不運にも流れ弾に当たり戦死した。

はかまだてるお
袴田輝男 一佐。水陸機動団幕僚長。

むなかたしん
宗像晋 二佐。第一水陸機動連隊第二中隊長。

いわながほまれ
岩永誉 一尉。第一水陸機動連隊第二中隊第一小隊を率いる。

たつむらしげと
達村茂人 曹長。岩永誉一尉の女房役。

さかきばらけいすけ
榊原啓介 三曹。地元は九州。

〈第一ヘリコプター団〉

むらたもりと
村田護人 三佐。村田家次男。

むらたりんこ
村田凜子 一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

〔西部方面隊〕

はむろやすのり
葉室泰徳 二佐。西部方面隊西部方面ヘリコプター隊の副隊長。村田護人三佐が教育部隊を出てはじめてUH-1汎用ヘリの操縦棒を握った時の上官。

わじまみずえ
和嶋瑞恵 一尉。CHのベテラン機長。

〈海上自衛隊〉

〔南支派遣艦隊〕

たかとおまさや
高遠雅也 海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

そめ や とし お
染谷俊雄 一佐。首席幕僚。

ばん どう かね と
板東兼人 一佐。"かが、艦長。

かね さか
兼坂すみれ 二佐。艦隊情報幕僚。

〔第七航空隊〕

ふじ わら み さ
藤原美沙 二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるU-36Aのライセンスももつ。

〔インド洋派遣艦隊〕

ご み いき み
五味勇美 海将。連合艦隊司令長官。航空集団司令から、自衛艦隊司令を最後に退官。P-3C乗りで、藤原美沙の父親に鍛えられた。

え がわ とし き
江川俊樹 海将補。

たけうち こうすけ
竹内幸輔 一佐。作戦幕僚。

〔ヘリ搭載護衛艦"ほうしょう、〕

いずみ だ せん えい
泉田宣泳 一佐。艦長。

はし ぐち はじめ
橋口肇 二佐。副長。

みやぎ あす か
宮城明日香 一尉。気象班長。

〔哨戒機部隊〕

は た の まこと
波多野誠 一佐。"ヤマタノオロチ、戦術航空士役。テスト・パイロットであると同時に、マサチューセッツ工科大学で航空工学の博士号を取った変わり者。コールサイン：メデューサ。

たばた ごろう
田端悟郎 二佐。"ヤマタノオロチ、機長。

ゆう き み さ き
結城美佐紀 一尉。"ヤマタノオロチ、副操縦士。

〈航空自衛隊〉

〔二〇二飛行隊〕

むら た さき と
村田先斗 二佐。F-35Aに乘る。村田護人、凜子の兄。

〈統合幕僚監部〉

こいそ こより
小磯小代里 統合幕僚監部参事官付国外運用班長。青柳睦己と岩倉久彌を尻に敷く督戦隊の官僚三人組の一人。制服組からは蛇蝎の如く嫌われている。

〈防衛装備庁〉

しまぎ さう し
島崎蒼士 技官。航法援助のシステム開発を行う若手。

〈海上保安庁〉

う がき せい し ろう
宇垣詠志朗 二等海上保安正。"なつぐも、艇長。

いし ばし だいすけ
石橋大介 三等海上保安正。"なつぐも、副長兼機関長。

うめ の ゆきよし

梅野悦哉 二等海上保安士。“なつぐも、レーダー担当。

《内閣府》

こ が はじめ

古賀肇 内閣府政策統括官（経済財政運営担当）。

《内閣官房》

あおやぎむつ き

青柳睦己 内閣安全保障・危機管理室室長補佐。若手防衛官僚のホープだが、慎重派。海南島上陸作戦にも反対していた。

《外務省》

いわくらひさや

岩倉久彌 総合外交政策局安全保障政策課課長補佐。北米課が古巣。自ら国務省霞ヶ関出張所と自嘲するほどの対米従属派。

〔吉野ヶ里〕

もり た こう たろう

盛田浩太郎 吉野ヶ里中学校の校長。

しらさきせい と

白崎征途 吉野ヶ里中学校の教頭。

かはら さ や

華原沙也 吉野ヶ里中学校の音楽教師。

ムンヒョジョン

文晔庭 韓国から交換留学で吉野ヶ里中学校が受け入れていた若い教師。九大に留学していた。

は むろつばき

葉室翼 吉野ヶ里中学校の新聞部部長。

えだ の きみ え

枝野君枝 吉野ヶ里中学校の新聞部員。玄武ミサイルで軽傷を負う。

こ が ひろし

古賀裕史 文晔庭と交換留学で韓国の釜山東中を訪れている佐賀県の教師。

う が き い み

宇垣詠美 記者。地元新聞社の入社三年目。全国紙を落ちて地元新聞社に就職。佐賀出身で宇垣詠志朗二等海上保安正の妹。

さわ い め ぐ

澤井芽俱 インターネット・メディア会社の編集者にしてライター。『ゆう君ママの戦場リポート』を配信している。

//////アメリカ//////

《アメリカ合衆国大統領行政府》

エリザベス・ケンジントン 大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン 国務長官。

コリン・コンラッド 大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートンの上司。

アマンダ・マクノートン 新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー ホワイトハウス広報室長。

〈^N国家安全^S保障^A局〉

ベッティ・マイズナー 空軍少佐。戦死したカズオ・レベジェフの恋人だった。

〔ソウルアメリカ大使館〕

ロバート・B・ワイズナー 大使。元太平洋軍司令官（海軍大将）。

コーディ・R・キム 政務官。国務省のキャリア外交官で、ワイズナーが韓国へ赴任する時、自ら指名してソウルに連れてきた人物。

〈海兵隊〉

セリヌ・D・タッカー 海軍少将。少将に出世したばかりの女性。

〔第三海兵遠征軍〕

ウェイン・R・ヴァンペルト 中將。第三海兵遠征軍司令官。海南島攻略作戦の指揮をとる。

グレン・ギャレス 少将。参謀長。

キャスリーン・アイザック 中佐。航空参謀。F-35Bのパイロット。

〔第三海兵師団第三偵察大隊B中隊〕

アルベルト・タイラー 中尉。第三海兵師団第三偵察大隊B中隊武装偵察隊を指揮。

エイベル・リンカーン 曹長。アルベルト・タイラー中尉の女房役。

グレイグ・フィリップス 伍長。

〈陸軍〉

デレク・キング 中將。黒人の陸軍中將。別名クラッシャー・キング。海口攻略の海兵隊を指揮するためにきた。

ダニー・ジェンキンズ 少佐。陸軍の心理カウンセラー。心的外傷後ストレス障害^Sの治療^Dを専門としている。元グリーンベレー指揮官で心理戦のスペシャリスト。デレク・キングのお目付役。

中国

《中央弁公庁》

ファンシュエマオ

範 学毛 中国共産党中央弁公庁主任。

チエアリ

賈 礼 日本の中国大使館経済処参事官。

〈陸軍〉

〔海南島独立守備隊〕

マオアイチン

毛愛軍 少将。海南島独立守備隊を率いる。出世や賄賂とは無縁な軍人生活を送ってきた、ゲリラ戦研究の第一人者。

ホアングアンイン

黄冠英 大佐。作戦参謀。

〔第一〇一待機旅団〕

リンカン

林剛 大佐。これまでの功績により昇進し、新たに第一〇一待機旅団の指揮をとることになった。

シモン

石萌 中佐。ハワイでの戦いにおいて情報参謀として素晴らしい働きをみせて中佐に昇進し、部隊を率いることになる。

スットン

蘇桐 中佐。情報参謀だったが、石萌が参謀長役を固辞したため参謀長に昇進。

〔第22連隊〕

チエンホンダ

銭宏大 中佐。第22連隊政治将校団副隊長。

ホウエイ

侯燁 少佐。銭の部下。

シェンヤン

（瀋陽航空宇宙大学）

ジュービンビン

周冰冰 博士。瀋陽航空宇宙大学。丸眼鏡の小柄な女性。

ハオユー

皓宇 瀋陽航空宇宙大学の学生。

（香港）

シユイユウキン

徐裕堅 元高級警司で、香港警務処機動部隊を率いていた。〈スケアクロウ〉の正体にして、姚芳芳の恋人。

ヤオファンファン

姚芳芳 クー・シェンロンの妻にして、香港のジャンヌ・ダルク。今は香港に舞い戻っている。

ルウハイウイン

陸海栄 学生運動家。学費のために自ら二重スパイを志願していた。

アグネス・リョン 日本のニュース番組に出て、堪能な日本語を話す有名人。

大韓民国

《国家情報院》

リュジン

柳珍熙 副長官。

チジュンユル

池俊烈 中佐。副理事官。

ホンウンソン

洪應善 韓国大使館参与の肩書きをもつ。融和委員会のメンバー。

〈空軍〉

〔第11戦闘航空団〕

ソンキョンテ

孫庚泰 少将。航空団を指揮する。

オキョンジュ

呉京周 中佐。第112戦闘飛行隊を率いる。

ビョンガンミン

辺光敏 少佐。飛行隊の副隊長。

〈海軍〉

キムジンイル
金真一 少将。韓米同盟艦隊司令官。

〔海軍第五戦団〕

オムジョンウエン
嚴鐘元 大佐。参謀長。

ナムジファン キムスヒヨン
南智勲 少佐。"金寿鉉、艇長。

チャンイルジェ
張日載 大尉。副長。

〔第九八潜水戦隊〕

パクヨンジュン ソンウォニル ボンボムド
朴永中 中佐。孫元一級潜水艦の七番艦 "洪範図、艦長。

チョンヨシハ
田英学 少佐。"洪範図、副長。戦争になる直前にソウルから異動してきた。

クンエン
斤永 中尉。航海班員。

〈海兵隊〉

ソンジユウォン
孫周原 少将。海兵隊部隊を率いる。

クンヒヨサン
斤孝相 大佐。

バクミンチ
白珉台 中佐。第二三四海兵予備役中隊を率いる。元は韓国最大の軍事顧問会社の中東派遣部隊を率いていた。

チヨンデウン
鄭大恩 少佐。副隊長。

〔第二海兵師団〕

ユンベクヨン
尹白龍 大佐。第二海兵師団第二戦車大隊を率いる。

///シンガポール///

クー・シエンロン ヤオ
ファンファフ 元首相。夫人は香港人の民主運動家であった姚芳芳。

ウン・テクバ 外相。議会の古株で、滅多に感情を表に出さない男。

覇権交代7

ゲーム・チェンジャー

プロローグ

香港科技大学で准教授として量子理論を教える
三重野駿博士は、部屋に並べられている物資を
見て、頭を抱えていた。

まるで八百屋のようになっていたからだ。

段ボール箱一杯にフルーツが入っている。バナ
ナにリンゴ、トマトもある。また、ビスケットが
詰められたものは二〇箱以上あるようだ。

これらは、ヘルメット姿の学生らに運び込まれ
たものだ。そして疲れた表情の学生が好きなもの
を取り出すと部屋から出ていく。その繰り返しだ。

一方で、部屋には床で寝転んでいる者もいる。
催涙ガスを吸い、咳き込んでいる者もいた。

警官隊が水道に催涙ガス成分を流しているとい
う噂が流れてから、みんな水道水を飲まなくなっ
た。化学専攻の院生は怪しげな中和剤を作り、目
薬の代用品として配っている。

また工学部の学生は校内に敷かれていたレンガ
を剥がし、セメントを自作して戦車の侵入を防ぐ
バリケードを作っていた。いくら三重野が「レン
ガを並べても、構造的に戦車の質量には太刀打ち
できないよ」と言っても、誰も聞く耳をもたない。

現在、外国人教師には退去命令が出ていた。香
港に骨を埋める覚悟でやってきた三重野も、すで
に家族は日本に帰している。自分がここに留まり

続けるのは、大学当局へのアピールだ。大学も学生も見捨てず最後まで留まったという姿を見せておけば、それだけ教授のポストにも終身^{テニ}在職^{ユア}権にも近づけるはずだと考えた結果だ。

これまで三重野は、マサチューセツ工科大学^Tで寝る間も惜しんで働いていた。働くと言っても、それは研究という格好良いものではなく、単なる労働であった。金も無く、親と留学直前に結婚した妻に、生活を支えてもらっていた。

自分が帰国する際には、どの大学にスカウトされるかが国内の学会の関心事になったらしい。しかし三重野は日本に戻らなかつた。

日本には、満足な研究環境を提供できるような大学や企業は一つも無かつたからだ。ひたすら国外で、衰退^{すいたい}する日本を眺め続けた末の決断である。今いる香港科技大学は、世界でも指折りの教育環境をもつが、三重野を「日本人」として見てい

たわけではない。MIT帰りの俊英^{しゅんえい}として迎え入れてくれたのだ。この大学の教授や講師陣の約七割は、三重野と同じく世界中からスカウトされた一線級の研究者たちによって占められていた。

三重野の存在が日本国内で大きくクローズアップされたのは、香港科技大学が提示してきたスカウト条件をSNS上で公開した時だ。

最低五年間の研究保障^{ほしょう}、家政婦と家具付きのアパートメント、大学の専用駐車場、年間決められた回数^{かいすう}の国際学会の出張は全てビジネス・クラスで。それとは別に、年三回は家族全員がビジネス・クラスで帰省できる権利を有する――。

日本人研究者たちが悶絶^{もんぜつ}したのは、大学が提示したサラリー^{サラリー}の金額を目にした時らしい。彼らが得る一〇年分のサラリーが、三重野の年俸として提示されていたのである。

これを見た日本のメディアからこぞって取材を

申し込まれ、三重野は一瞬だけ世間の脚光を浴びた。一方で裏切り者呼ばわりするメールをよこす匿名集団^{どくめい}もいたが、三重野としては、別に金に釣られて日本を捨てたわけでは無い。そもそものが、ポストはもとよりまともな研究環境が日本に無かったため、自然と海外に活路を見出ただけだった。

年俸や条件を発表したことについても院生時代の指導教授から批判されたが、日本が貧しく^{ます}なったことで、そのしわ寄せをどれほど大学が、研究者たちが受けているのかを世間に広く知ってもらいたかっただけなのだ。その決断については、今も後悔はしていない。

そして三重野は、長年の苦労に見合うポストとサラリーを手に入れた。自分を非難した者たちは、井の中の蛙^{かわず}だ。外の豊かさを知らず、日本が今でも先進国だと信じている。塹壕^{ざんこう}に立て籠もってじ

っと耐えていればいつかは日が昇り、また豊かな時代が訪れると信じているだけだ。

実際、香港に来てからは驚かされるばかりだった。こちらの大学にとつてのライバル校は、もはやハーバードやカリフォルニア大学ロサンゼルス校、MITなどではない。ライバルとして見るのはシンガポール大学であり精華大だった。MITの先端ラボで何が研究されているかなど気にもしない。最も意識するのは、精華大の出す論文なのだ。

最初は世界を知らない連中だと見くびっていたが、一年も経つと彼らが学術研究に注ぐエネルギーの大きさに圧倒されるようになった。

まるで、高度成長期の日本のようだとも感じた。軍事への予算を教育と研究に回し「世界の工場」として君臨^{くんりん}していた日本が、この二一世紀の中国を舞台に再現されようとしている。

あと二〇年もすれば、中国や中華系大学の出身者でノーベル賞の争奪戦が繰り広げられる。三重野はそう固く信じていた。

香港と大陸を隔てる川は大きいものの、学術研究で世界を支配するという野望に関しては、信奉する政治体制が違うにもかかわらず、彼らの確信と協調態勢に疑念は無い——。だがそれも、昨日までの話であった。中国が日米との戦争に突入すると同時に、香港の民主化運動が再び着火したからである。

かつての雨傘運動あまがさを率いたヒロインが再び舞台ぶたいに現れると、学生たちは暴徒と化し、大学もロック・アウトされた。

三重野が借り物のザックにフルーツを詰めていると、極限探検部部長の李宇航リウ・ワン・ハン「ウエイン・リー青年が「ダメダメ」と、片言の日本語で話しかけてきた。それから早口の英語で「それは、僕らが

詰めますから」と続けた。

「先生は、自分の身の回りのものだけ確認してください。今回、余計な荷物を持つ必要はありません。重たい荷物を背負ってうっかり怪我でもされたら、山から降ろせなくなるでしょう。だいたい先生、ティーチング・アシスタントT Aは院生の仕事だし、保護者の伝言を伝えるだけなら僕たちだけで平気です」

「そのTAは、僕がここで日本人留学生の面倒を見るところという就業契約の中に入っていることだし、もちろん彼は香港人だけど、ご両親には留学生全員がお世話になっている。他の学生なら、こんなことまでしないけど、これは僕が行く義務があるものなんだ。仮に連れ戻せなくても、彼の返事を直接聞いてご両親に報告しないとね。だいたい彼、そういう政治的な思想の持ち主だったの？」

「まさか。男が命を懸ける時には裏に女あり、で

すよ。決まってるじゃないですか」

「君は違うだろう」

三重野とリーは、昨年リーの部隊が日本アルプス縦走にチャレンジした時にいろいろアテンドしてから付き合いだ。あの頃はほとんど毎晩、計画を立てるために会っていた。

その経験から、三重野も登山や装備についてはそれなりに詳しくなったつもりだが、自分ではハイキングの趣味は無い。

「僕らは専門家だから任務を引き受けたまでです。僕ら以外に、大陸派の包囲網を突破して味方に補給物資を届けられるようなスキルをもった人間はいませんからね。各大学のワンゲル部や探検部横断のプロジェクトです。と言っても、序盤は縦走路をハイキングするだけ。われわれにとっては日頃鍛錬で登っている裏山です。全行程でも、五キロから七キロでしょう。問題は包囲網に接近して

からですが、それは行ってみなければわかりません。強行突破になるのか、それとも秘密のルートを開拓する必要があるのか。でも、先生の安全を第一に行動しますから！」

「そこは信じているさ。リーさんのプランニング能力は、十分見せてもらっているし」

「先生も、高尾山くらい登ったことはあるでしょう。あれより一〇〇メートルも低いんです。たいしたことはありません」

「あそこは普通、ケーブル・カーで登るのであって、麓から歩いて登ったりしないんだけどね。僕はそれすらしたことがないけど。本当にこんなことをお願いしてもいいのかな」

「外国人に状況を見てもらうことは大事なんです。たとえこの運動が潰れたとしても、世界に散った人々が歴史の生き証人になってくれる」

三重野を含めた七人のチームは、大学のフェン

スを破つて学生たちが作つた通用口を潜ると街中に出た。

催涙ガスの臭いは無い。この大学は香港の中心地に比較的近いが、それでも地下鉄は通っていないし、そう便利な場所にあるわけでもない。ビクトリー湾から半島を挟んだ北隣の湾沿いだ。機動隊や武警も、郊外まで掃討そうとうしている余裕は無いのだろう。

その点で、ビクトリー湾に面する一等地にある香港理工大学のように、学生運動の一大拠点にならずに済んだとも言える。日本で例えると、あちらは銀座ぎんざか新宿しんじゅくの一等地で、科技大学はといふと八王子はちおうじとはいかないまでも川崎かわさきか市川いちがわぐらいの郊外感がある。

だが状況は流動的だ。地下鉄が走っているがこより更に中心部から遠い名門・中文大学では、警官隊と学生が衝突したという。

本当に、明日はどうなるかわからないのだ。

中国軍がいつ戦車を押し立てて大学に侵攻してきても不思議ではない。

不幸なボタンの掛け違いから世界大戦に発展した日米中国の戦争は、終盤しゅうばんに差しかかるうとしていた。

中国はオアフ島に上陸して一時ホノルル占領に成功したが、日米はたちまち奪い返し、逆に海南島かいなんとうへと上陸した。

軍事的には勢力圏を狭められつつあった中国だが、外交戦で挽回ばんかいする。韓国かんこくやシンガポールを味方につけ、東南アジア諸国連合A S E N各国の中立化を急いでいた。

そんな中で日米両軍は、海南島の占領作戦を急ぎつつ、中国が海南島を失う程度では白旗を揚げ

ないだろうと予想すると、香港を主戦場にしようとした。海南島に全戦力を終結すると見せかけて香港で反大陸感情を煽り、北京を揺さぶる作戦を立てたのだ。

中国政府としては、香港を失うことで国の内外で面子を潰されることを甘受するか、戦車部隊で香港に侵攻して若者のデモを鎮圧するか、の二者択一を迫られた。

また中国は、軍事制圧を行った場合、日米がどこまで香港民主派の軍事的支援に出てくるのかわからず、対応を決めかねていた。

第一章 ポリティックス

日米両軍は、海南島と大陸本土を海峡で結ぶ入り口である海口^{カイコウ}市に迫っていた。

アメリカ軍海兵隊と陸上自衛隊水陸機動団は、街並みを見渡せる場所まで前進する。彼らを阻む^{はば}ものは、路上のバリケードくらいしかない。

人民解放軍も、彼らと行動を共にする韓国軍の姿も消えていた。近くにすることはわかっていたが、攻撃してくる気配は無い。

戦場とはそういうものだ。ゲリラ戦でなく部隊行動下での戦闘となると、攻撃と小休止が繰り返される。

大事なことは、相手を眠らせないこと。ひつき

りなしに砲撃を行い敵の安眠を妨害し、恐怖を拡散させることが何よりも優先されるのだ。

だが今は、双方の部隊が次の戦闘に備えて息を潜めていた。海兵隊も自衛隊も、昨夜の戦闘で消費した武器弾薬の補給を急ぎ、市内への侵攻ルー^トの研究に没頭していた。

一方、空では、アメリカ空軍の作戦が着々と進行中だった。海南島で作戦行動する輸送機や海兵隊機を撃墜して飛び去る謎の戦闘機を追い、その出撃基地を特定して爆撃する作戦が進んでいた。

海兵隊が「ゴースト」と名付けたその戦闘機は、無人のステルス戦闘機「暗剣^{アンケン}」であると特定さ

れたが、機体を発見する術も撃墜する手段もまだ無く、今は海上自衛隊のエアボーン・レーザー機を出して敵の攻撃を防ぐという消極的な作戦しかとれていない。これまで航空自衛隊のF-35A戦闘機が目視照準でバルカン砲を撃ち、辛うじて一機を撃墜していた。

この「暗剣」を、F-22A「ラプター」ステルス戦闘機が密かに目視追尾し、出撃基地まで辿ろうとしたのだ。

F-22戦闘機は「暗剣」を追って大陸沿岸部に上陸し、しばらく戦闘機を追撃した後に引き返してきた。後は国家^N偵察局^Rの仕事だからだ。

そして、「暗剣」が消えていった辺りの偵察写真をマンパワーで搜索し、その出撃基地をついに突き止めることに成功した。

「暗剣」は極めて危険な戦闘機だ。次の出撃機会を与えることなく叩き潰すことが望ましく、その

爆撃に備えて、南シナ海上空を四機のステルス爆撃機が飛行していた。

出撃基地発見の報せとともに、彼らはすぐさま針路を変更すると、トンキン湾へ入る。昼間だったが、中朝国境付近には低気圧が張り出していたため、下から目撃されることはなかった。

もとより、中国沿岸部のレーダーサイトは全て潰してあったが。

グアム・アンダーセン空軍基地を拠点とするB-12Aステルス爆撃機で編成された第一三爆撃飛行隊・飛行隊長のケンドル・マコーミック空軍中佐は、コクピットから身を乗り出してサンガラス越しに雲下を覗こうとした。

一面の雲で海面は見えない。だがエンジン音は下まで聞こえるはずだ。漁船を装った中国のスパイ船がいる可能性はある。

思えば、この戦争がはじまった時から第一三爆

撃飛行隊は出ずっぱりだ。ほとんど全ての作戦に参加していると言っている。

マコーミック中佐は、そもそも米中が戦端を開く切っかけになったジョン・F・ケネディ国際空港での民航機同士の衝突事故で、妻と娘二人を失った。それは中国の情報部隊が仕掛けた発電システムへのサイバー攻撃が引き金の事故であった。

彼は部隊を自ら率い、上海シャンハイにあったその部隊の

ビルを爆撃した。続いて中国のエネルギー源を絶つために、わざわざインド洋から大陸に乗り国境線沿いに奥地まで飛ぶと、ロシアとの燃料パイプラインとステーションを爆撃。さらに韓国が中国に寝返って日本の軍事基地をミサイル攻撃した後オウは、航空機雷を抱いて韓国の主要港を封鎖し、鴨緑江リッポウコウにかかる橋を落として中国からの援助を絶った。

中佐の部隊は、軍事目標そのものよりも、経済

を疲弊ひへいさせる戦略目標の破壊で成果を出していた。

今追っている「暗剣」は、驚異的なゲーム・チェンジャーだという話だった。レーダーには写らず、最新鋭の光学センサーを装備しているF-35戦闘機にも見えない。いや、実際にはカメラに映り、人間には確認できるのだが、電荷結合素子CCDから情報を得るシステムがそれを飛行物体として認識しないのだ。

CCDの特性を利用したステルス技術。しかも何かの触媒しよくばいを用いることで、排気が出すレーダー反射すら消している。後ろから追いかけてレーダーを浴びせても反応は無いらしい。まさに「ゴースト」だ。

挙げ句に、それは有人戦闘機ではなく無人戦闘機で、人間のパイロットにはできない重力加速度がかかる高機動でのドッグ・ファイトをやつてのけるらしい。



マコミック中佐の編隊は、スラッシュ暗剣、部隊の最新の交戦情報を、東シナ海上空で受け取っていた。データではなく、海上自衛隊のエアボーン・レーザーに同乗していた空軍少佐が認めたテキスト・メッセージで。

「この、スラッシュマタノオロチ」という機体ですが、凄いですね」

右側の副操縦士席に座るシンディ・ガリクソン大尉が、その報告をタブレット端末で何度も読み返しながら呟く。彼女は部隊で一番若いパイロットであると同時に、この、スラッシュスピリッツ・オブ・キティ・ホーク、号の副操縦士として、中佐同様全ての作戦に参加している。家族を失い意気消沈する飛行隊長を良く支え、任務をこなしてくれた人物だ。

「ああ、そうだな。それに、良い作戦だと思うね。エアボーン・レーザーの射程内に戦闘機を留めて

おとり 囲とし、敵が撃ってきたら片っ端からミサイルをレーザーで撃ち落とす」

「でも肝心の、スラッシュ暗剣、は撃墜できないのでは。この飽和攻撃に耐えるレーザー兵器をもつても……」

「敵も頭が良い。戦闘機ではなく、エアボーン・レーザーに絞って攻撃を仕掛けるとはね。私が飛行隊長でも、咄嗟の判断は迷う。しかも戦闘機に對しては、距離一万からミサイルを撃っているのに、エアボーン・レーザーには五キロを割った至近距離まで接近してから仕掛けたという。あの機体がどれだけ脅威かを理解した上での行動だろう。プロジェクト・マネージャーがいるとしたら優秀だな」

「われわれが狙われたら、どうします?」

「そうだな。スラッシュ暗剣、は短射程のミサイルしか撃っていない。弾頭威力はそれほどでもないはずだ。

脱出する時間があることを祈るしかないな。事実として、これまでも武装ヘリや輸送機のクルーは脱出できていないが、戦闘機のパイロットはかなりの脱出に成功している。チャンスがあることを祈ろう。現状、われわれに対抗する術はないからな。しかし、こんなに近くから出撃していたとは……」

司令部から送られてきた座標は、トンキン湾から目と鼻の先だった。真っ直ぐに飛べば五〇〇キロもないが、ベトナム領土にいったん入り迂回^{うかい}して向かうため、七〇〇キロほどの距離になる。

敵が整備を終え次の攻撃に進進するまでに、基地ごと叩き潰せという命令が下されていた。

それほどこの「暗剣」は、アメリカ軍にとっても脅威なのだ。

「何だか、勿体ないですね。この機体を奪って研究すれば、開発中の第六世代戦闘機に活かせるの

に」

「君もそう思ったか」

中佐は笑いながら首を振る。

「出撃前、ラプター部隊を率いるマット・シンクレアと話したんだが、彼も爆撃するなんて馬鹿げていると怒っていたよ。デルタでも送り込み、せめて一機でも丸ごと無傷で確保すべきだと。この機体からは多くの情報が得られる。その知見は、われわれの戦闘機開発に活かせるからね。滑稽^{こっけい}だよ」

「それって、おかしいことなのですか？」

大尉は真顔で聞いてきた。

「いや、だってさ、軍事技術ではぶっちぎりのナンバー1のアメリカが、たかが中国の軍事技術に對して、参考になるから無傷のままで手に入れろだなんて、惨めで滑稽じゃないか」

「しかし、米ソ冷戦時代では似たようなことはあ

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。